

朝も、昼も、夜も、逢うも、別れも

アーユ・ボーワアン

東郷 敏

スリランカまで、およそ九時間、週三便という機内、ほぼ満席。世界的観光地モルジブへの中継地になっているらしく、聖地スリランカへは、われわれだけといってもいい。さて総勢八十名の大旅団、座席の希望はできない。従って隣次第で旅の玉石も決まってくる。これは相身

互い、さていったい、シートはと探す。

らしきところに、なんとオレンジ僧、その隣が私の席、ああ己ぬる哉、地獄に仏とは、このことをいう。さらにその隣は、随分むかしおじょうちゃんだった人、抑私の心掛けがよくない、向っているのは仏教の聖地、属している旅団は

感謝報恩、誠を捧げる神聖なグループ、有らぬ
思いを抱くなど以つての外。上座仏教の教えに
も「あらゆる悪行を絶ち、善きことを思い、善
きことを行い、清浄な心を保つべし、これ仏の
道なり——と人間あれが欲しい、これが欲しい
と渴望するは、苦悩のはじめなり、この悪魔を追
い払えない様では、仏弟子にはなれぬ」と簡明
に説かれている。実に要を得ている。それにし
ても憎つくきシート。幸先がよくない。しばら
く悶々として時を過ごす。通路側がオレンジ僧、
度々用足しもできない、動いてもいけない、無
作法な姿勢も、などと思っていると高ぶってく
る。

なんだか急に下腹部のあたりに蟻りを感じる。
だんだん半ばでなくなり「エクスキューズミー」
と言う。『どうぞ』と返ってくる。また「スミマ
セン」というと『プリーズ』とくる。対話出来
ているのか不思議な思い。こんどはオレンジ僧

『キャンユースピークイングリッシュ』と来た。『ノー
サ、アイキャンスピークジャパニーズ、ベルウェ
ル』と応え、大笑い。もうすつかり落ち着き、
ほぐれてきた。用足すなどどこへやら、矢継ぎ
早や、幼稚愚問は承知の上、失礼無礼顧りみず
スリランカ事情、上座仏教の「いろは」につい
て私が知り得なかったこと等。お蔭でスツカリ、
スリランカ通になる。私はひとときも聞き逃し
たり、見逃したりはしない。見る気になって、
聞く気になって、自身の細胞に叩き込んでゆく。
八時間もの個人レッスンの特別学習の成果であ
る。つくづく思う、私はなんと運がいいのだろ
う。ダルマ・パーラーに深く由来する御方である。
コロンボ大菩提寺の日本スリランカ仏教センター
(千葉蘭華寺上座仏教寺院・管長バーナガラ・
ウパティッサ)に活躍中の若き開教師、一年半
ぶりの帰国だという。まこと縁とは異なるもの味
なものと言うが、巡り合わせ、この出逢いに不

思議なものを感じる。

師に聞いてみる。いちばんのたのしみは『アンマー（母）に会うことです』。聞いていて目頭が熱くなるではありませんか。

Y. パンニヤラマだと名乗っている。さて比丘ヨ「旅は道づれ、世は情け」とか、「袖すり合うも多少の縁」とか、こんな諺きいたことありますかの、「シリマシエン」「ワカリマセン」という。マコトニ逢い難き良き因縁。

やがて再び日本に帰られたのは、ひと月もあとのこと。突然デンワに、いまニッポンカエリマシタと弾んでいる。『アンマー（母）が、アリガトウといていた』とてもよろこんでいたという。スリランカ到着時、「再び帰らざることを思い、ホンノ心ばかり、お母さんにと頭陀袋に押し込んでやった、そのことのようにだった。なんだか、聞いていて、ヨカッタと思う。なんだかほのぼのとしたものを感じる。この訪問記も、



出発前方丈の命で書くことになっていた。考えてみると、出国ゲートを潜ったとき既に聖地モードに自動転換させられていたことになる。いやはやと言うより、ほかない。

さて機は予定通り、バウンドしながら唸っている。

夜の八時というのに、湿り気を含んだ熱風、ドドッと汗が吹き出す。赤道直下、北回帰線に挟まれたスリランカ。これ位は当然なのだろう。

待機中のバスにのる。シャンデリヤと絨毯じゅうたんに包み込まれた空港リムジンバス、豪華だなあと思いつつ周りを見回す、わが団員ばかり。外国だとは思えない。実に不思議。入国査証や荷物など一切関係なく、全くストレートに、多分或る建物に横付けされている。

入口から中程。彩りを添えた美女軍団、ライトやテレビカメラが賑々しい、白詰正装の政府の要人もいる。またオレンジ僧など騒々しい出



迎え風景。同じ機に、多分どこかの国の偉い要人が乗っていた、従ってそのあとになる、おそくなるなあと思っていると、『クロダシエンシェイ』と大声で連呼している。どうもお目当てはこの旅団らしい。

早速団長先頭に順々と入室する。例の美女たちが手に手に、「アーユボワーン、アーユボワーン」と首にレイを巻きつける。入り口正面には『VIPルーム』と大きく明示されている。途端パニックしてしまう。VIPはこの旅団だった。

これは国賓待遇なんだと、はじめて認識する。待ち受けているのは、高僧、狎下各大臣、政府の方々だという。

代表・Drカルナセーナ・コデイトウワック文部大臣より歓迎のご挨拶、約一時間歓談したのち、荷物の確認をと、アナウンス。それぞれバッゲージのチェック。貼られたステッカーに、大きくVIPと表示されている。単なる旅

団ではない。国と国のレベルに位置している。マコト、スローガン通りだった。よくVIP並だとジョークで言ったことがある。これは正真正銘重要人物として扱われている。実に懐かしい気持である。すくなくとも私はそれに値していない。いわゆるモグリだ。胸騒ぎする。

今朝の新聞だと掲げるその各紙拜見、一面に大きく紹介されているのは、親善使節団、黒田団長他八十名の記事が載せられている。さあこれは大変。

昨年旅団結成時、国交樹立五十周年記念行事という大スローガン。スリランカ政府や仏教界の関係者の方々が、国際派スリランカ通の、黒田武志住職を軸に、各界有志お歴々が名を連ねる混成チーム。一年半も前からその準備にとりかかり、日本・スリランカのさらなる親善と融和を深めるのが狙いと認識はしていた。しかしどうもタイトルが仰々しい。

先の大戦、不幸にして敗戦国となった日本。窮地の世界から救い出してくれた国、それがスリランカだという。

いまさら遠い昔のこと、すべては時効だといいたかった。そんなことよりダルマパーラーといい、ジャヤワルデネ大統領といっても、私には、恩も義理もまた関わりもないこと、しかし滅多に行けない宝島、この際観光専一にさせていただきたい、なにか親善行事らしきものがあるとするなら、すべて黒田団長と役員の方々が処理する、残り団員は、買ひ物と観光三昧にさせていただけたらと、戯れごとではなく本気で方丈に申し上げたことがあった。これまで大概、笑って聞き流す方丈。何故か、このときは違っていた。さすがに頭が血がおのぼりになったように、日頃柔和なお顔がひきつり、みるみる不動明王。灰皿でもあったら手が伸びそうな形相。その時は思った。やはり心にあるものをそのま





ま言うてはいけない、少し繕^{つくろ}ってモノのいい様もあつたと反省。

『トーゴ、オレは悲しいヨ』睨^{にら}みつける方丈。人知れず、早くから、いまこそスリランカ国に対し、感謝、報恩の誠を捧げ尽すとき、ひとり踏ん張^{ふんが}っておいでだっただけに、この語、許すわけにいかなかったこと、想像できる。

前後したが、すべては、スリランカ空港に、降り立^たつたときから状況は一変。すっかり親善

大使になりきる。そのひとり代表として振る舞うことになる。これは私だけではない。団員すべてにいえること。「人間というものは、自分の都合によって見事、変り得るもの」。こんな盛大な歓迎を受けたということは、いったいなんであつたのか。国レベルといつても、文部省と仏教界が中心になっている。

必ずしも財界が関わっているようには思えない。明らかに文化・教育・宗教・歴史という観点から、この旅団の位置づけがなされているように私は思う。そのすべてのベースはスリランカの国及び人々と黒田団長が二十年に亘る深い交流と真の信頼関係を築いてきたという経緯、その基点に仏教という共通、共有するものがあり、点と線で結ぶところにダルマパーラーという存在が、彷彿としている。

この間、NPO、NGO発祥の地とされる、スリランカ、サルボダヤ財団からの国際賞の受

賞またダルマパーラスリランカ大菩提会より、特別貢献賞、そして横浜善光寺留学僧育英会、二十年に亘り百十名の留学僧に奨学資金を贈呈、その人材育成に尽力しているなど、広く中枢と関わっていることが、国を挙げて、或いは仏教界こそぞってという必然性を生み出したものと思う。

さて日本とスリランカの歴史には、光だけではなく影の部分もあったと思う。現代の価値観だけで過去を評価したり、処理してしまうことにはいささか問題もあり、しっかりとした歴史認識があつてこそ、互敬の間柄をさらに深く尊くとりもつことができるということを実感する。

VIPラウンジから、バスまでは約百米。漸くホテルに向う。一步広場に踏み出した途端、鐘や太鼓、吹奏樂に取り囲まれ、身動きできない。遠すぎるバス乗り場。突然の遭遇と、衝撃に戸惑い、オロオロするばかり、誰も彼も自分達になにが起こっているのか、整理ができない



でいる。旅行社の方々もVIPといい、この出迎えといい、初体験、戸惑っているのが本心だという。入国のための手続きが一切省かれていることに眩惑しているとさえいいうから、普通ではない。「成寿」見開きに、種々写真が載せられているから、ご覧いただくと、想像がつかう。それでもこれは序の口だった。

翌日、いよいよダルマパーラー（基調講演の中に述べられている）ゆかりの地。その寺院、大菩提会に向う。寺院は、日本との交流が深く千葉に蘭華寺（上座仏教）を興し、双方の住職である、バーナガラ・ウパティッサ大僧正が案内する。コロンボ市の中心地なのか、バスがスローダウン、沿道に人が溢れている。その道路沿い、色鮮やかに民族衣装に彩られた各種踊り子たち。鼓笛隊、騎馬隊、金モールに包まれた象群。白バイ、パトカーなど、お祭りに出会う。バスの中はおおよろこび、運がいい、など

と、写真やビデオに収めている。ガイドに尋ねてみる、なんのお祭りですか。『コレワミナツサマノ、カンゲイデス』多分にジョークだと聞き流す。ただ、なにがあっても、起こっても驚かなくなっている。その行列の横を流しながら、しばらくすると、さあ着きました、と行列の最前列あたりに降ろす。

ところがすでに黒田団長、役員をとり囲んだテレビ・新聞など報道機関、政府・仏界の要人に、インタビュウ等、カメラの洪水に流されている。驚きたくないが、やっぱり、オドロク。歓迎の中をかき分けるように寺院へと歩く。途中頂度阿波おどり風景と同じように道路沿い、物見ヤグラが置かれ、そこに団長・役員が招かれ坐るやいなや、待機中の民族芸術団。

次々、特技の披露、心より持て成してくれる。その間、約一時間、空港のカルチャーショック、放心状態がぶり返す。症状は重症。道路上至る



処、横断幕、見ているだけで国、民族、文化、価値観、歴史といったもの大いなる違いを感じさせられる。関わっている人達は、数千人単位、いったい費用はどれだけ、手弁当でもあるまい、誰が、など貧しい思いに心が走る。こんなことに甘んじていいのかどうか。人々のあたたかい心やふれあいに、なんとも言えぬ、胸の痛みを感じる。

やがて太陽が真上に差しかかるころ、導象・ドウゾと象に引かれ、大菩提寺詣り。寺院山門の右サイド、『家なき護法の人、ダルマパーラーの立像』、そこに額かか付き、方丈と同行の大乗僧、献花、読経。ようやくひと段落、それとなく、導かれるまま、大祖殿に入堂する。

これまた祖堂一杯、信者とオレンジ僧、溢れかえっている。私の心は静思を求めている、しかし裏腹に正面舞台では、歌や民俗舞踊、さらには上座と大乘の融合。相対しダルマパーラー

に尊崇と感恩をこめ、上、大、和しての読経会。秒単位でスケジュールは流れている。最上壇、黒田方丈より、ウパティッサ大僧正に、木彫り日本仏陀像の贈呈。第二十回当地、留学僧に奨学金を授与するなど次々と各大臣の祝辞をいただきながら繰り広げられる歓迎の舞台。おわりはない、途中うしろ髪引かれる思いで旅団、中座する。

三時からという使節団最大のメインイベント。国際大会議場へと向かう、この建物スリランカ独立の父といわれる、バンダーラナーヤカ首相を記念して建設された、国内最大のものだという。途中、首相官邸をウパティッサ大僧正の案内で表敬訪問。首相と二十分間、交歓の時をもつ。

首相は方丈に対し、大旅団の来訪に謝意を示し、日本とスリランカは最も遠くて、最も親^{ちか}い国。同じ仏教国として共有共感を覚える、ダル



マパーラーにはじまり、彼のジャヤワルデネ大統領のことは引用しながら、今後も救け合う間柄を密にし、さらに国交を深めたい。方丈のサラボダヤ国際賞、またわが国の留学僧の育英に、多大な貢献を尽くしてくださったことに、感謝する。わが国の不幸な紛争も終結に向っており、安心して旅を続けていただきたい、と実に淡々と、多用な時間を削いで、歓迎いただいたことに感謝せずにはいられなかった。官邸を後にしながら、やつぱり、『使節団』なのだと言を正しネクタイをギュッと結び直す。

忙しいというは、心が亡いという。しかし全く食事する時間がない。こちらの都合で入場に差しつかえては、国の信頼に関わる。なんとなく急に徒事でない身辺を憂慮するようになっていた。方丈も基調講演のことが気掛かりなのか、原稿を開いたり、閉じたり、対話に事欠いている。近代的大会議場は三ヶ国語による同時通訳

が可能、方丈も安心して臨める。

ことざますなりと会場に入れるのかどうか、状況から、或いはと思ったりする。

間もなくだとガイド。広大な公園に入ったと思ふ瞬間、左手に高さ十五mもあるうかと思える大仏陀立像、それに相對峙、まさしく大会議場、囲われた垣根からは、およそ二百m。収容二千名というから、規模が窺える。バスを横付けする。入口正面道路沿い車窓からはみ出して、高さ五m、横二十mの立看板、黒田団長の肖像と『日本親善使節団のみなさん、スリランカにようこそ』と、シンハリ語に添え掲げられている。もうなながあってもオドロクことはない。さらに道路より会場まで、両サイド、民族衣装と、例の踊り子集団、ギツシリと手に手に両国の国旗を振りながら、祭り囃子の渦の中。おそらく数百、数千と思われる熱烈歓迎。やつぱりオドロイタ。喫驚仰天といふか、呆気に取り



れるというか、表現のしようもない。

ソロリソロリと揺れ動く親善使節団。蝸牛かたつむり一里の道も四里の道程のり。炎天下、一時間かけて漸く、会場のドアに辿り着く。会場内は全階全席、立錫の余地もない。怒涛のごとく押し寄せる拍手喝采。熱気に酔いしれる。ロック大会に行つたことはない。しかしそれを連想する。

また、よぎる。この動員力と、費用はいつた、い、どうなる。それを察する余り感動と、気懸かりが錯綜する。国を超え、民族を超え、時空を超え、共感共鳴する曼陀羅の桃源郷。東の空、八千kmの隔りはない。あるのはまさしくグローバルレレッジ。地球はひとつの村という思いが、胸を衝く。交歓はすすみ政府・仏教界など各界ご代表の挨拶、歓迎、まことにプロローグは延々と続く。さらには数百名の上座部仏教僧侶群と大乘仏教、僧侶による融合の三千世界。舞台上はこれまた、三疊はあろうか、黒田団長の肖像

が吊り下がっている。その真下壇上に、報道各社カメラが囲み、いよいよ基調講演のスタート。待望の三ヶ国語による同時通訳、器材不良につき不能。よくあることです、すべてが大様。

直前に連絡を受け、関係者を狼狽させる。方丈に『サマーワンナ（ごめんなさい）』。どういたしまして（カマクナハ）、全く気にしない方丈。滔滔と演題『ダルマパーラーの贈り物』を説いてゆく。見事にパッケージされダルマパーラーの生涯、会場のひとり、ひとり、隅から隅へと届けられる。

そんなこともあるうかと、入場時全員の手許に三ヶ国語翻訳講演集が方丈より届けられている。四十分に亘る熱弁も、アーユーボワーン、アーユーボワーン、ボホームラストウテイイ。（どうもありがとうございます）合掌。

方丈だから出来た危機管理。安堵する。ついに、国交五十周年親善使節団の大義、これもっ



て無事終了。—のはずだった、しかし延々それから四時間。南十字星のもと、宵越しの明星まで、歓迎の夢舞台は続いていたという。旅団はスケジュールに刻まれ止むなく途中退場。サマーワンナ（ごめんなさい）。

さて方丈の基調講演の間、身動きしろうもせず、その横に居て、終始見守っていたひとりの僧。その風貌まさしくダルマのモデル。このダルマ大師（私はそう呼んでいた）世界的スリランカ国ペルポラ財団の総裁、ペルポラ・ヴィパシイ大僧正。旅団到着時より、帰国時まで、旅団からひとときも離れていない。連ねるバスの前後、運転手つき超高級車がへばりつく、旅団の代表、役員の方々が使っていた。

多分政府差し回しのものだと思っ込んでいる。最終日、ヴィパシイ大僧正の提供車だと聞かされ驚く、当然にして大僧は、旅団と共にバスの中。ところがこのダルマ大師、政府内だろうと

大寺院だろうと、行く処、敵無し。辺りを払うその歩き方は王像。旅団の露払いをいただく。

思うにスリランカで兵隊の位なら、元師か大将などと、ひとり値踏みしていた。これは慇懃無礼、私流許していただく。旅行中まこと畏れ多く、話すこともない。また、シンハリか英語だけでなく、ズーツと無言の行。いよいよ帰国時、VIPルーム。マイクを手、『サヨウナラのご挨拶』とまことに流暢な日本語、途端、私は肩の力が抜け、ダーツと疲れがでてきた。一週間もバスの中でご一緒して、まったく無視。車窓に映る、スリランカ事情や、風物に好き勝手な評をくだしてきている私、してやられたと後悔する。それならそうと、最初から言えば……。

私が書きたかったことは、こんなことではない。基調講演のすぐあと。多分飛び入りだと思う。司会席、マイクの前に仁王立ち通訳なしの大法話、身ぶり、手ぶりとは裏腹に、会場はシー

ンと聞き入っている。後にも先にも、通訳なしはこの時だけ、都度、日本名誉総領事、ネルソン氏、方丈付き日本からの通訳者、ウイリアム・ダンカン氏がその役を担っていた。この間全く通訳しない。ネルソン先生も聞き入るだけ。旅団も、仕方なく聞く。

やがて、日本語らしき、ガンバレ、がんばれ、と数回。これは旅団に対する激励。

期せずして旅団は反応する。拍手万雷。しかし会場からは全く反応なく深閑かみとしている。こちらの拍手が浮き上ってしまった。

いったいなんだったのか。気になる。

大僧正は訴えるように、叫ぶように閉じた。

結局、帰国するまで、内容について知る機会はなかった。それでも知りたいと思う。帰国早々、スリランカ大阪総領事を訪ね、ネルソン領事に収録したビデオを見てもらい、直訳を頼む。領事は躊躇。スリランカと日本の比較なんです、



そのままでは少し聞き辛いかもシレマセン。悪い意味ではないのですが、ただ同じ仏教徒として根本的に決定的に違うところがアルンデス。

私は言う、誰に気兼ねしているのです、日本人の良さは、外国から好き勝手言われ、それを、沈黙して聞く民族です、ご安心ください。そのまま聞かせて下さい。いやあヴィパシイ大僧正に許可をイタダキマセンと、またいう。私は申し上げた。何を言うのです、スリランカは、八千kmも離れています、すぐわかるものではありません、スリランカは遠いのです。どうぞどうぞとお願いした。

そんな時分割り込んで、ネルソン氏の携帯デーンワ。ハローハロー英語交じりのシンハリ語。ゴメンナサイ、トーゴサン、いまのデーンワ、スリランカのトモダチデス。デーンワは東京からですか。イイエ、トーゴサン。スリランカのコロンボです。どうして八千kmも離れているのに

電話が通じるのかなあ。そんなこんなで漸く……。

本題。私（ネルソン領事自身）について、日本に三十二年も滞在その間日本の経済学博士、名誉領事を務めながらあらゆる分野で活躍している。日本通において第一人者、私の兄貴分です。今日、私たちはお釈迦さまの愛と慈悲によって、日本とスリランカの素晴らしい親善の集いことができました。使節団の皆様を心より歓迎したい。

いま法話をくださった、黒田武志大僧師は、スリランカの国際賞、サラナンダ国際栄誉賞と、唯一称号（ダルマ・ケールティ・スリ・ローカルタ・チャリエ・仏教の発展と世界人類の幸福と繁栄に尽くした人）を受賞されている稀なお方です。また、スリランカと日本の間の留学僧に国を越え、二十年に亘ってその育英資金と人材育成に多大な支援と力を尽くし、日本を代表する、大僧師です。そして誰よりも、スリラン

カを愛し、スリランカの全てを承知しているといっても過ぎてはおりません。

日本は過去、いち早く欧米の文化を受け入れながら、そのままをとり入れず、それ以上のものを独自につくり上げ、世界で最も近代化の進んだ国です。そして模範的仏教国なのです。日本人は、また素晴らしい仏教文化と伝統をもっています。この特別先進国である日本は経済的に豊かな大国なのです。これは日本人の勤勉さと、秀れた能力によるものです。日本との関わりは、黒田大僧師のご法話の通り、アナガールカ・ダルマパーラーにはじまり、先の不幸な大戦で、日本は敗戦国となった、一方スリランカ（セイロン）は戦勝国となり、日本を戦犯として裁く側に立っていた。しかし存亡と危機。未曾有の困難の中にあつた日本を、救いたい一念から同じ仏教国として、御釈迦さまの教えのもと、全権大使、ジャヤワルデネ大臣（後、初代

大統領)は、愛と慈悲の精神を世界に訴え、各国全権大使を動かし賛同を得る、そして日本の国土は分割を免れ講和条約を結ぶに至ったのです。結果、日本は真の独立と自由を掴み、以後めざましい発展を遂げています。

年々歳々著しい経済成長と産業の発展は世界中の途上国に対し今日多大なる支援と援助を行っていることはご承知の通りです。これは一体どういうことなのか、私はいつも考えるのです。スリランカと同じ島国であり、仏教国という共通、共有するものを持ちながら日本は近代国家であり、経済大国。スリランカは、歴史的には日本より、早くから近代国家をめざしたにも拘らず、いまだ発展途上国だということです。

さらに大きな相違は『日本人は贅沢しながら、苦しんでいる』一方『スリランカ人は、経済的に苦しみながら、楽しんでいる』。これは私の比較論である。しかしこの違いは歴然としており、

50 Years of Sri Lankan - Japanese Friendship

BMICH - Colombo

9th March 2003



Pelpola Vipassi Foundation

実に不思議です。

スリランカは自然に恵まれ、天災、地変は日本に比べれば皆無に等しい、それに常夏だから、衣・食・住についても贅沢さえしなければ特に不自由がない。(頂度執筆中、テレビでニュース、スリランカに未曾有の豪雨被害甚大、死者多数。そんなはずは…)一方日本は、自然に恵まれず(日本は四季折々自然に恵まれていると思っっている)、天災、地変、特に地震が多く、災害に見舞われ続けている。人口密度は高い、資源も乏しい、或る意味で、「生きる」ことが非常にむづかしい国である。だのに日本は発展し続け近代化において世界をリードしている。日本には『ガンバツテクダサイ』ということばがある、イチロー・ガンバレ、マツイガンバレなどいつでも、なんにつけても、ガンバレ。ガンバレ(旅団は耳なれた語に素早く反応、一斉に拍手した)と言う。





このことばによって日本は喚起し、新しい試みをし続けている。スリランカ（シンハリ語）には『ガンバレ』という意味に該当することばがないのです。いったい『がんばる』とはどういうことなのか、私は調べてみたことがある。

二十五年前、仏陀の教えの中に、自分を高めるために努力する、勉強する、その気概なければ、その人の成長は乏しい、というような意味のものを探し出したことがある。しかし、いまでも昔もスリランカにはこの語が存在していない、むしろガンバル必要はない、ということが長期に亘って浸み込んでいる。

あまりにも自然環境に恵まれ過ぎて、日々の生活はがんばらなくても、食べてゆけるといふことに在る。またがんばらなくても、『なんとかなるさ』という心がすっかり根付いているからである。つき詰めてゆくと、仏陀の教えに『欲望は苦しみ、悲しみを生む』パーリー語でタン

ハーヤジャヤテイソーコという教えが少なからず影響を与えているように思う。日本のガンバレも、意味するところ、『我を張る』と語源がなっている、それを見ると同じ意味でも時代と共に、国と共に、民族と共に、変化しているように思う。日本人の『贅沢しながら、苦しんでいる』ということは、或る意味で、仏陀の教えは正しいと思う。裏を返せば、スリランカ人には存在しないために、努力しない、努力しないために、経済的に豊かになれずに近代化できずにいる。

いまひとつ、日本には存在しないものがある。植民地、多民族という問題は持っていない。スリランカ人に『がんばらなくてもいいのか』と問えば多分『いいヨ、なんとかなるさ』と応えるに違いない。どうでしょうか。

私はあらためて聞きたい。みなさんほんとうにそれでいいのですか。日本人はいつでも、大いなる心意気と、エネルギーとバイタリティー



をもっています。私たちはもっと日本と日本人から学び、同じ仏教国として助け合い、分かち合い、影響しあって、私たちが愛するスリランカの国を、子供たちを発展的に幸福に導いて参りましょう、そして世界にも貢献しようではありませんか。

今日のために、早くから準備をしてくれた文部大臣閣下をはじめ政府の各閣僚、僧界のテラワダーと長老の皆様にご心より感謝します。最後にこの親善交流使節団をスリランカに導いて下さった、横浜善光寺・黒田大先生とアジア文化協会、並びに各団体各御歴にどうもありがとうございますと申し上げます。

合掌

概ね直訳いただいたものと思っっている。寺院、仏蹟を訪ねながら、車窓に流れる自然や生活風景を追っていた。スリランカは植民地の時代が終わり日本より五年も早く真の独立と自由を手

にしている。置かれた国土はお釈迦さまの生誕地から目と鼻の先、南伝（小乗）仏教の出発点西欧に最も近い仏教国、国語のシンハリは世界唯一、パーリー語（梵語ともいい仏教聖典に用いられた古代インドの言語）に近いという。

まさしく仏教先進国なのだ、期待しない方がおかしい。私の中に勝手な想像と、ある尺度がこびりついていた。

スリランカは世界でいちばん素晴らしく、仏教文化が花開いている国、期待はどんどん膨らみ、弾けるぐらい膨らみすぎて、自身なにか処理しきれないものがあつた。しかし、現実はずいぶん、経済的には決して豊かには思えない。

日本の常識的目から見ると、これでも仏教先進国なのかと、淋しくさえ感じてしまう。しかし何故か、人々の顔も、心も温かい。どこに行っても、モノ売りや押し売りが全くない。皆無とっていい、ここにはなんとも表現しがたい遠

く美しい「生き方」というものがある。行く先々であたたかく歓迎されればされる程、体が空洞化し素直によるこべない、挙句の果て悶々として帰国する。しかし空洞は未処理のまま埋められずなにか充ち足りない、なんとも言えぬ蟠りに心が晴れずにいた。

黒田方丈よりスリランカ事情を伺っていても、美しき流れの中で、お話いただくものだから、真の実態が掴みきれない。時折方丈に申し上げたこともあった。なぜスリランカですか、なにもそんな遠くまで渴仰かつこうしなくともいいじゃありませんかと、しかし訳していただいたヴィパシイ大僧正の話を伺い、この時点でもなにかも瞬時に吹っ飛んでしまった。あまりにスリランカ人と日本人を見事に表現されていることに覚醒した思いする。この時点で空洞は埋まり、完全に充たされている。スリランカへの旅は、悠久の流れの中の或る分点にめぐり合わせている。一

種のカルチャーショックと、知らなすぎた自分、恥入りながら書いている。

大僧正、さすが国際通、世界の中のスリランカを検証しながらあるがまま、自立、自助の精神に心を致し、宗教のみならず国の再興、再建を踏まえ、或る程度の近代化と経済的にも、状況を一変して、他の国を援助、支援、そして貢献できる国づくりをする必要があるのではないかと問いかけ、多分に政治行政の分野とは思いますが、血を吐く思いで、絶叫し提唱されているように思う。

かりそめにも、文化や伝統、自然をひっくり返してまでとは微塵にも言っていない。スリランカらしい近代化と変革、改革というものがあに違いない。

世界の中で『ガンバラなくてもいい』ところがあった。黒田方丈は、あまりに日頃『ガンバラすぎて』から、しばらくスリランカに移

住されたらいかかなものかと帰国したらご機嫌を伺いながら具申したい。国それぞれとは申せ、二千五百年も『欲望は苦しみを生む』という思想と信念、それを守り続けていることに感動を覚えると共に呆然とする。

伺えば、成る程成る程と思うことが重なってくる。たとえば自然保護区とか、動物保護区なるものは、スリランカが二百年も前に条例か禁令なるものを定めて保護している。その発祥の地だという。やはり普通の民族ではない。いままでこそ、自然保護、環境保護、動物保護区などで彼の先進国、近代国家が謳い上げ、躍起となっている。どうにも気づいた時は遅過ぎている。しかし状況はやらない訳にゆかない地球環境。手の施し様もなくなりつつある。ところがスリランカの人にとって保護は極(ごく)当り前、ガイドが言う、『人間は自然に保護されているのであって、人間が保護する』というだけそれた考えに立って



はいけない、あくまでも共存共生することが大前提なんだ』と言っていた。実に説得力がある。それでも共生することには危険がともなう。熊や象、ヒョウといった猛獣を人々は恐れはする、しかし危険排除のために殺すことは全く考えられないという。毎年相当数の人々が死傷する事故に遭っても、それは「宿命」として受け入れる、そんな諦観のようなものが働いているという。

人々の、仏教的な人生観や自然観というものが実によく表現されており、実際、移動している車窓に、猛獣類を見かける、バスを止めて待つ。或いは見せてはくれる。ガイドが外に出ないで下さいという。私に言わせれば人間が動物に飼われているような島全体が、『人間類二本足保護区』とでもいえるような思いがする。また、動物たちからは、この二本足で歩く不思議な種類を、面白がっているのかもしれない。そんな

ことを考えていると実にたのしくなる。

さらには日本や世界の先進国の間で不足している角膜提供の殆んどは、スリランカだという。アイバンクはいまでは当り前、この発祥はスリランカ、サルボダヤ（全ての者の覚醒）だというから、納得できる。

スリランカは多民族、それぞれ異質の文化や価値観、風俗、習慣、など違うのではないかと思う。しかし方向を共有し共存する基層文化というものが仏教的素地の上にかにも美しく根付いている。多民族は必然的に多宗教国家でもある。圧倒的仏教徒シンハラとはいっても、ヒンズー、イスラム、キリスト教など、さまざまな宗教と民族が融合する特定な聖地がスリランカにあるという。アダムスピークという山らしく、そこを全宗で共有し、宗教を超えて各宗教が巡礼するという慣習。

スリランカ人のフトコロの深さを感じる。先



の紛争、内乱など多分にほんの一握り、民族間（シンハラとタミール）の対立と抗争、紛争と内乱、これはスリランカには似合わない。どちらが支配するにしても、利益にはならない。共通の聖地、国家として方向を共有することが絶対条件。執筆中、六月九日〜十日、世界五十ヶ国と機関二十代表が日本に集い「スリランカ和平と復興会議」を開催、世界中から四十五億ドル。うち日本は十億ドルの支援を表明、大変な額である。一日も早く和平の道を開いて欲しいものだ。人々の平和な暮らしからは、想像もできない。

主な親善の行事を終え、やがてスリランカ中央部山岳地方、キャンディという都市を訪ねる。京都か奈良を思わせる古都。ここには無数の寺院が林立し、スリランカ仏教界をリードする。いわゆる仏教の中枢寺院、僧侶数十万人、信者一千数百万に対する情報発信基地。



歴代王家の子孫も、ここキャンディに住む。

殊に、靈驗あらたか神の如く、崇め奉られている仏歯寺。なんでもお釈迦さまの左の糸切歯がそのまま保存されているというから、お釈迦さまをほんとに身近かに感じてしまう。また歴代王位継承は、この歯の保持により、その権力を保ってきた。日本のご皇室も、何度かお訪ねになつていと聞く。

かつて王家の子孫だという方から寺院の案内と、仏歯についてその歴史を承る。そんな時分、一瞬周囲が総立ちになり、合掌低頭、なにかと覗いていると、両手に乗せられる程、可愛いといったらいけません、枯れてしまった、菩提樹のように、飄飄と、霞でも召し上つておいでではなかるうかと、まことムダのないプロポーシオン。並の修業でないことがひと目でわかる。それでも目は爛爛として、凜とした気魄、辺りを払っている。私は、息を呑む。咄嗟に、ああ、

ガンジーが生きていた、と叫んでしまった。無礼も度が過ぎている。このお方こそスリランカ仏界最高峰大猊下。

口々に運がよかったと手を合わす。大猊下は旅団を待っていたという。そしてご法話まで承る。ご三家二十一個の鍵が揃わねば開かぬ、開かずの扉。仏歯のすぐ近くに導くといったご褒美まで頂戴する。

大変なご利益をいただいた様な気がする。キツト残された旅団と善光寺檀信徒の人生にいいことがあるに違いない。しかし偶然に運がよかつただけではない。この淨福与えられたるもの、旅団に対するスリランカ仏教界のご尊慮、畏れ多く汲みとることができた。

さてスリランカの仏教事情。紀元前三世紀(釈迦生誕は前五世紀、日本への伝来は紀元後五世紀)というから、入滅後僅か二百年位で伝播されたことになる。いわゆる原始仏教(南伝上座

部仏教) 実に日本仏教と千年の隔りがある。その仏教も二千三百年の時を経て、紆余曲折、基本的教義は変わらなくても民族、社会、政治、風土、文化等の影響を受け、現象面では、あらゆる変化を来たしたものと想像できる。

民族間の比率はシンハラ系(インド・アリア系民族)が圧倒的、人口のおよそ七〇%、それがそっくり仏教徒だという。不思議なことで信者数が出る。日本は先ず不可能、数字が出ない、これが個人と檀家の違い。タイの九四%、ミャンマー(ビルマ)の八五%に次いで高い比率を保っている。

憲法でも国教化している状況が頷ける。スリランカで出家した僧侶は、妻帯しない。七歳で出家が許され、十歳で得度、断髪、見習僧を経て、成人の暁、資格が認められると、具足戒(ウパサンパダー)を受け、やがて正式な僧侶(比丘)になるという。教義の中心は、この世、す



べて無常。人生は苦(思い通りにならないこと)に満ちており、これを克服するには、現象としての一切は縁起によって成立。無我の境地から、すべての執着を捨てるのが肝要だと説いている。

上座も大乘も人の生き方や心を救済するという目的は同じでも、上座は出家中心であり、大乘は出家せずして究極のさとりに達することができるという違い。日本と同じ仏教だから仏陀の真理は変わらない。ただ二二七の戒律は、上座部仏教が、半端でないことを窺わせる。立つも坐るも、眠るも息することさえむづかしい。これに比べると、日本大乘仏教の僧侶の方々は九九%破門の憂き目を見ることになる。黒田方丈は、このところ実に見事に駆け抜け、独身時代上座仏教にも身を委ね、得度し二二七の戒律に護られ、行三昧。嫁とりや飲酒などその欲求と邪念払えず、突如また大乘に帰還、こちらあ





たり黒田武志独自に編み出す二刀流。原点、基点に身を致しながら希れな修行と免許の皆伝をする。善光寺留学僧育英会の発想も二二七の戒律に委ねる中での発願だと謂う。やはり並のお和尚ではない。その時々で随分呼称も変化する。私が知るだけでも雲水にはじまり、坊さん、行脚僧、比丘、開教師、生臭坊主、住職、方丈、名僧、老僧、高僧、大教師、間もなく長老。等々。一本の皴にも、つるつる天辺の輝きにも黒田武志団長の履歴と重みが表現されている。

さて、いま少し、スリランカ仏教と日本仏教の、信者側から見た違いを、私なりに迫ってみたい。黒田方丈に大、小の違い、その在り方を尋ねてみる。実に滔滔とお話しいただく、ところがすぐ眠くなる。私は簡単に簡単にと、お願いしても、簡単なことをいつの間にか難しくされるものだから、途中で頓挫するのが常。どうも、仏教辞典には、シンプルという字がない。

これは方丈の責任ではない。仏教に対する私の基礎知識が乏しいための理由と、理解する能力がないことに起因している。しかしこのところを解決しない限り、仏教は過去のものになってしまう。お釈迦さまはそんなにも難しく説かれたとは思わない。難しくすれば偉そうに見られる仏教環境が、布教活動を阻害していることに気づくべきです。平均的一般的信者はわかり易い仏教を求めているのです。

スリランカの仏教は、原点は同じだといっても、現象面で、私には全く別ものに感じられる。寺と寺院、僧侶と比丘、檀家と信者。日本の僧侶は、衣の色によって階級が示されている。上座部比丘はオレンジ色、階級が全くわからない。仏教の原点はインドの仏陀。時間の流れに沿うよう、南方系（上座）、北方系（大乘）、チベット系（モンゴル）と伝播されて来た。それぞれ国々の中で南方、北方が、或いはチベット

系が混在していない。宗教の中で、この在り方は、仏教にだけ限られ、他の宗教には見られない現象。

こんなことは、素人の発想。学者や専門家の方々からは笑われると思います。あれこれと私は不思議なのです。例えば、キリスト教なら、プロテスタントとカトリック。イスラム教ならシーア派とスンニー派。ヒンズー教ならピシュヌ派とシバ派、というように国の中で混在し同居する。そして同じ国の中で、同宗、宗派間の抗争が絶えない。ところが大乘、上座は国単位でしか存在しない。勿論、国の中では、あらゆる宗旨、宗派に分かれてはいるが、大乘か上座仏教でしかなく、それから抜けられない。これには、なにか大きな理由があるに違いない、私にはわかりません。しかし天地自然を尊ぶ仏陀の教義が大きく働き、個人絶対崇拜とはここに決定的な違いがあるのかもしれないと私は思っ

たりする。勿論日本に、タイ、スリランカ、チベットの上座寺院がない訳ではない、存在している。ただ本格的な普及活動は、行われていないし、檀家制度と信者制度の壁は安易にとり外し融合出来るものではない。いづれにしても、布施、供養する習慣がないのも理由のひとつ。全ては大様な仏教の在り方が、それを疎外している要因と思う。仏教の在り方は、どうぞどうぞでも信者の熱意と真摯さは、仏教以外の他宗教には及ばない。説得力の乏しい仏教の弱さは日本の中に新興宗教を乱立させるゆえんでもある。

バイブルなど読んでさえいけば大概解るし、絶対神と信者の位置が歴然としているから、位置さえはつきりすれば簡単に、神の子になり、神と共にあり、神に従うという心は、自然に起きてくる。瞬時にでもそれは可能。しかし仏教はそうはいかない。お釈迦さまとの間に距離が



ない。従って立つ位置がわからない。余程な行と知恵がない限り、仏陀と共にという訳にはゆかない。このところ出家された方々が近づけてくださる。力と知恵をわかり易く与えてくだされば、仏教も違ってくる。また仏教以外の宗教は絶対神であって、それは超えられない。キリストの信者にはなれても、キリストにはなれない。絶対になり得ない。マホメットしかり、バラモンをも。なぜなら、神であり、絶対神だからです。

しかし仏教はお釈迦さま自身が私に並びそれを超えろと教えているように思う。私は神ではない、あなたと同じ仏なんだと言われる。だから難しい。

いま、申し上げているのは、私の考え方と、とり方です。これは実に不遜、傲慢、横柄、等々、あるだけ並べて、なお足りぬ態度です。

スリランカの仏教に学んで、私は悩んでしま

いました。原点は同じなのになぜ、こんなにも違うのか。日本の仏教は普及する段階で、説得力ある宗祖があの手この手を尽くし中国に出かけては教義の理解、その説き方を変えて来たのだと思う。どれがいい、悪いなど、解るはずもないし、言えない。また言ってもいけない。空海も、最澄も、栄西も、法然も、親鸞も、道元も、日蓮も、瑩山も、また諸々教祖といわれる方々も、理解と説き方が少しずつ変わるために、一派を興してしまった。否、興さざるを得なかった。この祖師方、空海と最澄は少し古く同時。他の宗祖六名の方々はほぼ同年といってもいい程に、時間的開創に差がない。いまより千年前その前後わずか百年以内のこと。おそらくその頃、日本は、精神文明の大きな曲がり角にあったのだと思う。

いまの世界も日本もまさしく混沌の時代、大きな曲がり角にあると思う。みんなが精神的に

疲れきってしまっている。私も高度経済の急成長の時代を体験し、物質的に豊かにはなった。それでも尚、充ち足りず幸福を追いかけ続けている。瞬間つかんでもまた追いかける。ついには心は疲れ、限りなく充足感がない。同時に未だ来ぬ先の未来に言い様のない不安すら感じている。この不安と疲れを癒すには、どうしたらいいのか。頂度千年前の日本がいまたまた巡って来たと思っている。たとえば温泉に浸かるとか、按摩をするとか、そんなことでは当然解決しない。癒す知恵の問題であることは、誰にでもわかる。

そこで仏教こそ、知恵の宗教だといっているのであるから、それを解決するのはいまこそ仏教以外には、力を發揮できる宗教はない。方法はひとつ、僧界も迷わず一点集中お釈迦さまの知恵を借り、やり直し、出直し、取り組み直す必要がある。道に迷ったらスタートに戻れとい



う諺があるように、まず原点、「宗祖を通して釈尊に還る」限りなくお釈迦さまに「近い位置」に戻って欲しいのです。

信者は、檀家は、癒し、導かれる時を待っているのです。宗祖になれるのはいまです。私が近い位置というのは信者に叶わぬ位置なのです。先にも触れたように、旅団がダルマパーラーの祀られている大菩提寺に詣った時、黒田団長に従い、仏陀像に向い、いまにも供養の読経（般若心経）を唱えようとした時、ドカドカツとオレンジ僧（おそらくテラワダーと長老、そして住職）数十名が旅団の前列に並び坐り、旅団に対面したのです。いわば仏陀像を遮る様になってしまった。旅団は仏像に対面し、お釈迦さまに感謝の誠を捧げようとしている矢先なんの断りもない。戸惑うというより、呆気にとられてしまう。おそらく旅団の方々も奇異に感じられたと思う。これが上座仏教。



大乘仏教では、高僧も、長老も、信者も、仏陀像に對面して、すべてを執り行ふ。止むなく読経。そして供養物や、お布施を供えようとすると、お釈迦さまが、手にされる前に、すべて横取りされてしまった。こちらの頼みごとでも、多分盗まれ、お釈迦さまに届いていない。犯人はオレンジの衣を着けた、断髪（はげ）の男だと訴えたかも知なる。これでも仏教、原点は同じなのか。

いわゆる上座仏教の僧侶（比丘）は既に仏さまの位置に立っていた。これは日々二二七の戒律を守り、修行怠らず、自力で解脱し、（いわゆる輪廻からの脱却であり執着する心がない）苦や欲から全く解き放たれているということになり世俗の旅団とは、また大乘の僧侶とは位置と在り方が違うということを見せつけられたような思いがする。だから、上座部僧侶は信者より、足でも嘗められるように尊敬され、畏敬さえ感じられていることは当然であり、説得力のある

僧侶がそこに在るということをひしと感じる。私の『近い位置』とはそのことなのです。

よく方丈に『トゴ、オレを超えろ。犯せとも言う。坐ってみろ。いつまでも間違ったことを本当と思つて言つては超えられないゾ』と脅す。いま『近い位置』と書きながら、そのことかもしれないとひとり合点している。

機内で例のパンニヤラマ僧にあの手この手を使い、ワインなり、ビールなり、肉類を飲食させようと、意地悪をした。師はことごとく合掌してNoサンキュ。ワタシハ、クチニシテハイケナイノデス。という。じゃ、死ぬ前に、酒と肉しかなないとすればどうする。ワタシ、シニマスと来た。さて日本の大乘僧、そうはいかない。死の間際オレにひと口、吞ませてくれ。これも原点は、同じ仏教なのか。

ここのとこ多分に比較する意味で書いてみる。大乘には五戒のひとつに不飲酒戒なるもの

がある。しかし、そこにあるもの、いただいたものはムダにしてはいけない。ただほどほどにという。大乘では、これを薬用であったり、叡智の泉であったり、また究極的、智恵、真理を知る尊いものとして、般若湯とも呼んでいる。仏界には、捨戒の便法を駆使する天才がいた。

大乘と上座の違うところは、戒と戒律の差。

また大乘と上座は、布教活動に大きな違いを見せる。大乘は他者救済（利他）を重視するのに対し、上座（小乗）は、出家者の宗教的完成を重視する。歴史的には、上座は先輩、大乘は後輩、従って上座仏教の布教活動は、信者対比丘（僧侶）、大乘は檀家対寺（僧侶）。経営的には大乘は家単位である特定の寺の信徒となり、寺はこれを檀（一段上に置く）信徒、檀家と称し、法事、法要、葬儀等を執りもってもらう。布施の名目で経済的援助を持続的に行う。従って檀家と寺は一体の関係。上座は、あくまでも個人



であり、信者が布施、供養のために僧侶（比丘）に援助する（援助は表現としてよくない。あくまでも布施）。わかっているようで、わからないところですよ。

いずれにしても、寺、僧侶と信者の間は、援助関係にある。一方通行は公安委員会の道路標識だけ。大事なことは、深く仏道を信ずるといふことが前提であり、安心と立命はその延長線上にある。だからお賽銭出さずして乞い願うは、盗人のはじまりなり、思いきって出す。

さて大概の方々が上座仏教圏を旅行され、仏陀像に対し違和感をもたれたことと思う。私も手を合わせ、ご利益があるように思えない。これは上座圏から来られた方も、日本の仏像に同じ思いをされていると思う。日本のわびさびに對し、金、銀、珊瑚に彩られた仏陀像。まずヘアースタイルが随分違う。

たまたまコロンボの或る名利を訪ねた時、樹

齡四百年とか五百年、なんでもインドにはすでになくお釈迦さまが悟りを開かれた処から移植し、これがその原木の子孫だという、そのご神木、菩提樹の下で、たまたまそこにあつたご仏像について、なぜ天辺が鋭角に高くなつていいのか尋ねた。住職は大きな声で、「ああ」、そこに落ちていた菩提樹の葉っぱを拾い上げ、頭の上に乘せ、仏像を指差したのです。

全く同じ型を見たのです。住職は言う、菩提樹は仏の化身、最も尊い祈りの対象だと合掌して見せた。私は間髪入れず、その一枚を住職よりもぎ取つて、ポケットにねじ込み、持ち帰ってしまいました。それからいいことづくめ、ドンドン懐が豊かになっていきます。

のち方丈に、「日本のご仏像の天辺は南部鉄瓶てつびんですか」。方丈、ああオレは運命が悪くなる。なぜですか。こんなバチ当たりを言う奴と一緒だと。でも方丈、あたまを、びんたというのではあ



りませんか。「方丈……。」

やがて丁寧に教えてくださいました。お椀を伏せた様に二段になっている、あれは下の方が螺髪らはつといい上の方を肉髻けいという。巻貝のような渦巻は、すべて右回り。そこは広大無辺の仏の智慧。一杯詰め込まれているんですヨ。ホレ頭のいい人は螺髪に指差して、グルグル巻くでしょう。お前左巻まさだなどいわれたら、よろこべないんです。私はどちらですか、両方ですネ。トーゴさん頭は帽子の台ではないのですヨ。ハァー。さてぼつぼつ終盤にしようかなと思いつつ、仏教の知識がないと、馬鹿みたいなことに拘ってしまふのです。

ネルソン総領事に、いまいちどお尋ねする。スリランカは、自然環境の恩恵とその影響は承知しました。でも日々の生活でがんばらなくても食べてゆけるといっただけで、どうして満足なのか。ハイ、トーゴさん、そうです、贅沢は考

えないのです、がんばらなくても、なんとかかな
るといふことは、限りなく穏やかに、のんびり
と生きるということが仏陀の心に叶うと思ひ込
んでいるのです。ネルソン先生、あなたもそう
ですか。イイエ、ワタシ日本人デス。がんばら
なかつたら、今日にも死んでシマイマス。トー
ゴサン、郷に入つたら郷に従う、ガンバラナク
テワイケナイノデス、慣れるまで、三十二年カ
カリマシタ。私は安心致しましたと申し上げた。

さて人間には本来、神仏から与えられた定め
(運命) というものがあります。これを非常に
大事に思っているのです、どの様に転んでも仕
方がない。これは神仏の定めであり、試練だと
受けとめて生きる『生き方』が根底にあるんで
す。いまひとつ、『カルマ』、業というものを強
く信じているんです。或る行為というものは、
必ず結果をもたらすという理、いわゆる因果律
なのです。大乘でいう『輪廻転生』のことです。

だからなにがあつても、受けとめ、仕方がない
と思えるのです。ヴィパシー師のいう、裏をと
れば『笑いながら、苦しんでいる』とも言える
のです。

さあこれでは引き下がれない。人間には、生
まれながらにして、よくなりたい、いまよりよ
くなるために、なにをするか考えますヨ。よく
なる可能性を信じて、それはないのでですか？

どうも私には人間を放棄しているとしか思え
ないのです。というと、決定的なコトバが返っ
て来た。『がんばる』ことは欲望を充たすこと
です。欲望を充たすことは仏陀の教えに違ふこと
になるのです。『結果は苦しみ、悲しむ』ことに
なるのです。だから日本人は『贅沢しながら、
苦しんでいる』といえるのです。ほんとうに私
にはムズカシイと思いました。ここどころが
理解できれば、上座は卒業。

それでも納得できない。大菩提寺のウパティツ

サ大僧正にデンワする、上座仏教の本(大要)を送って下さいと直接依頼したところ翌日、クロネコが飛び込んできて玄関にドサツと投げ入れてくれました。御蔭さまで、没頭できました。結果、『解らないということがようやく解りました』。実に恥ずかしい。肝心なことは私が瞑想修行。そして二二七戒律を遵守する、やがて解脱した時、輪廻から逃げられることが、解ったのです。直感で解るのです。解脱の時分は、ワタシガ、ツチノナカニハイッタ時なんです。

ネルソン先生のいう、『業』カルマと宿業、輪廻転生について、日本の仏典に、『業』は行為であり、同時に『力』だだけ示してあります。わかりません。そこで頂戴した虎の巻、スリランカの仏教学者、クマーラスワミ博士がビリヤードの玉に比喻し説いているのです。これは実に面白い、想像しながら御覧ください。突き棒(キュー)で突いた玉(例えば赤玉)が、エ

ネルギー(運動量)をともなつて転がりはじめ。あらかじめ前方に並べた玉(例えば白玉)にぶつかる。最初の赤玉は、その時点で静止する。赤玉の持っていたエネルギーのすべてが白玉に移行し、白玉が動き出す。白玉は次の玉へとぶつかる。そして静止する。ぶつけられた次の白玉は移行したエネルギーをともなつて、また次の白玉にぶつかる、静止する。また次へと動く。そして同じことをくり返す。

クマーラスワミ博士は、赤玉は現世の肉体、そして動くエネルギー(運動量)を『業』カルマ。業はわれわれの肉体が『現世において朽ち果てても』なおその力『業』は枯渇することなく『来世へと伝えられてゆく』、これが仏教の精髓であり、倫理的な因果律の理法(ダルマ)だという。

いわゆる悪因悪果、善因善果、輪廻転生とは、そのようなものだ、肉体が消滅しても、自身が

つくった『業』は次の存在へと移行するのだという、マコト二明解。面白くも、恐ろしい譬えだが、実にわかり易い。来世に生まれる私はいつたいどうなる、心配になってきた。やっぱり、仕方がないと受け入れるか。

最後に親善使節団の使命とはいったいなんだったのか反省こめて総轄してみたい。基調ダルマパーラーからの贈り物は、日本国と日本仏教の関わりを十二分に伝えている。

およそ五十年前、昭和二十六年敗戦後、連合軍の占領下にあった日本、この国をどの様に処理するのか、自由を与え、独立させるのか。実に日本の命運と存亡を分ける重大なサンフランシスコ対日講和会議。

日本の全権大使は、吉田茂首相。無条件降伏という屈辱のなか、理由や希望が許される状況ではない。すべて蛮行と決めつけられている。

ソ連の提案する日本分割、戦利品として戦勝

国の自治領とする案はすでにその内容も示されていた。われわれ承知の通り、北方四島は戦利品として勝手にとられ、いまだ還さないロシア（ソ連）です。いつたい、北方領土という呼び方がなくなるのは、いつの日か。事態は日本がずたずたに切り裂かれ各国代表の思惑のなかに翻弄される。同じ敗戦国ドイツは既に分割され、東西ベルリンのその悲惨は長期に亘り続いていた。従って分割することは、状況として特別なものではない。（終戦時内閣書記官長迫水久常回顧録）

当時日本のアメリカ大使グループは、米大統領にマッカーサー元帥と共に、分割は日本の統治を困難にするとの意見書を提出、トルーマン大統領も無視できず、それにより賛否の決定を表明せず、検討に待つとしていた。戦勝国は四十五ヶ国、責任追及と賠償問題が絡むだけに方向は揺れ動いていた。（故、マッカーサーの回顧

録による)。

終戦間もなく(二十年九月)天皇がGHQにマッカーサー元師を訪ね、敗戦の将としての会見を求める。元師は平服で、出迎えず奥の執務室で待っていたという。『天皇は命乞いに来た』と側近に語ったことを述懐している。天皇、裕仁は「戦争の責任は、すべて私にある。国民には一切ありません。この責任に対し、私はこの命を連合国に委ねます。願わくばこの命と引き替えに、貴国より日本国民に食糧を与え、飢えから救って欲しい」と、余りの申し出に、元師は驚愕し、思わず、オー、マゼステイ、自ら段を降り手を差しのべ握手した。(この時の写真日本人の心情を思い永久に公開しないとのこと私はあまりの感動に抱きしめ、敬愛の念を示したい衝動にかられた。自らの命を投げ出し、国民を救うという行為は、過去の世界の歴史になかったという。やがて天皇を玄関まで見送った、

と記録が公開されている。

このベースに、勝戦国セイロン(スリランカ)代表、ジャヤワルデネ大臣(のち初代大統領)ひとり日本擁護の演説に立った。そしてソ連案に真向から対峙、Noと高らかに宣言、ソ連案のすべてを拒絶する。

演説に仏陀のことばを引用、参加国に最大の寛容と慈悲の精神を求め、さらにセイロン国は被った損害に対し、その賠償と、権利を放棄する、そして一切を求むるものではない。日本に独立と自由を与え、分割させないという約束が整なわねば、条約に署名しないと結んでいる。今私は思う、天皇裕仁陛下の犠牲心、ジャヤワルデネ大臣の犠牲と勇氣こそ、仏陀の教えに通う尊い賜りもの、大臣はのち述懐する。

日本とわが国は、数千年に亘り共通の文化と伝統をもち、深い絆で結ばれている。われわれは、同じアジアの仏教国として日本を擁護する。

わが国も仏教国だから、仏陀の教えに基づいて行動したのみである、という内容をのこしている。これに対する尊崇の念は全権大使吉田茂をして帰国後最高の敬意を示し打電している。やがて日本は解放され、四十ヶ国以上の条約文を整え、ついに独立と自由を手にする。許されるはずのない日本。最悪を最善に導いた仏陀のことばは生きていた。たったひとことが、国と人々の運命をすっかり変えてしまった。そして復興へ。ついに世界一の経済大国までにかけのぼる。

この歴史的事実は、日本人だからこそ均しく知る義務を感じてならない。いったいこの救世主について、どれだけの人が承知し、認識しているのか。実は私も、この旅団に加わるまで知らなかったのです。知る機会があったのかもしれない。しかし、その心がないから、見逃し、聞き逃してしまっている。これは自身にとって恥辱であり、悲しい。

ジャヤワルデネ大統領は平成八年十一月一日に亡くなっている。遂この前のこと。新聞各紙、対日講和会議の『憎しみは、憎しみによってやまず、愛によってやむ』との言葉を引用。吉田茂の回想録から、『ジャヤワルデネ、日本の知己ここにあり』を合わせ載せている。また入院中の大統領に対し、天皇陛下より、度々御見舞いの電報を打っている事実を拝読し、これは徒事ではないと実感する。

ところが、後日再び新聞各紙に、『ジャヤワルデネ元大統領の遺言日本人を救う』とある全誌掲載はされている。大概見逃してしまいたいような小さな記事。遺言は『私の角膜を日本人に』。遺言に従い角膜はすぐ空輸され移植、経過は良好。婦人、光の世界をとり戻す（群馬県桐生市）。

私も書くに当たり、限りなく資料を集めていた（殊にアジア文化協会の局長、上坂元一人先生の資料）。そこにこの記事。私は拝見しながら

嗚咽するとか、しゃくり上げ、どうしても、涙が止まらない。いったいこの方は、どこまで日本と日本人を救おうとしているのか。救っても、救っても、まだ足りない気持で救い続け、死んでも、尚、まだ救いの手を差しのべる。この犠牲心はなんなのか。

生前この方の語録に、『恩に報いるは人の道なり、恩を忘るるは人にあらず、恩は石に刻みて終生これを忘れず、怨みは水に流し、わが胸にこれを留める』。これは戦後久しくに亘り、日本からの支援、援助とODAに対するものであったと示されている。同じく、日本も鏡に向うがごとし、恩に報いるは人の道。私はあらためて『業』カルマというものの実態を見たような気がする。(尚、スリランカへの最大援助国は日本だどこに行っても耳にした)。

私の感動を筆に乗せることはできません。なんと、もどかしさを感じる。人の道、人の生

き方というものは、神仏、聖人の示す、標準、道理に従う以外、解決の道はないことを教えていただいた。

道元という、自未得度先度他の心、自分が未だわたらざる前にまず他をわたさんとする菩提心。これが愛であり、慈悲であり、仁恕、万人の心の奥にひそんでいる万国共通の尊く美しき心。この心を引き出すのが宗教であり、道に携わる僧侶の使命。そして宗教の目的だと思う。また人間の「理想」なのかもしれない。

私は書きながら他人ごとのように、或る先入観や偏見にとらわれ、熱慮じゅうりょのないままに、ここまで来てしまったように思う。反省する。

人間知らないことを知るまでにはずいぶんの時間と労力を必要とする。いい加減では、知り得ないということを感じする。知らず知らず、使節団となり、身に備しない歓迎を受け、身に余る旅団からの好意をいただいた。さらには、

黒田方丈団長が、スリランカを頭上に戴き、敬い慎んで、足を運び、留学僧を受け入れ、さらにスリランカに派遣し続けて来たのか、歴史認識と、その関わり、敬意を踏まえての行為行動。そしてひとり報いても報いても、なお報い足りぬ心で報い続け今日にあった。そんな事を、ようやく理解し、認識する。黒田方丈の尊い心、露知らず、わたしホントに馬鹿でした。方丈の真の底は仲々わからないのです。やはり、黒田武志方丈は、近世稀な、大化け物。

あとがき

出発の日、三月八日、慌ただしい世界情勢。中近東は戦雲垂れ籠め、アフガニスタン、イラクの戦場がインド洋、ペルシヤ湾岸沿いに展開中、まことに不穏な状況下、テロの危険サインもA。刻々と時間読みの段階に入っていた。さらにはアジア南西地域に得体の知れない新型肺

炎、大流行の兆しとか。いったいこれでも向うのか、団長も思案に焦がれているに違いない。

成田で、方丈大丈夫ですか。『大丈夫、弾は届かない、肺炎はハイハイエン人に移る病、この旅団、素直な方ばかり。ハイハイと。だから心配いりません』。嗚呼!!全く不感症という病。その通り、すべては帰国してから事態は急変、予想以上に深刻だったようだ。いかにも災い転じて、憂いなし。

旅行中、宿泊は、シングルないし、ツイン。これは希望による。

ツインは旅行社の偏見により、組み合わせされる。通知後は変更不可との達し、良し悪しは、時の運、『業』の世界。私は中外日報社形山支局長と寢室を共にする。旅団きつてのクール人間と、これ又熱烈人間のペア。夜な夜な討論し激論に至る。最後に私が水をブツかけられて沈没するというパターン。想像を超えている。機内

といい、部屋といい、私はなんと運がいいことか。『行くところ、必ず師有り』。すべてに勝るお方、よく人材というが、その通り、報道界の逸材。その博学たるや、動く宗教界の図書館、宗教界を分析、分解、方向づけに至るまで、ここまで識るかという程に、企業秘密を除外して、その残りの知識を頂戴できた。授業料は無料、私の献身的、湯茶接待のもてなしに、すっかり油断していただく。お蔭でこの旅行記も、スイスイと書けている。頭は帽子の台ではありません。

さてスリランカ出入国時のフリーパス、帰国時、成田空港審査官に旅団のひとり、ご婦人が引っ掛かる。さあ大変、「アナタハ、ドコニイツテ、ドコカラカエツテキタノカ」。スリランカでの査証もれが生じている。一時混乱したものの、方丈と旅行社の方が事情を説明、ようやく通過する。総理でも、こんなことはなかったという。



結局、グルグル回る人工衛星の前例にならない一週間、空中を彷徨さまよっていたという、大岡のお裁き、事無きを得る。これは実際、笑えぬ事実、フリーパスという大様さに、ご婦人のスリランカ訪問は、記録と証拠は隠滅、従って実績なし。

五月十日、善光寺開創三十五周年、留学僧育英会設立二十周年記念の大法要、大本山総持寺で挙行。その節、彼の大菩提寺管長、ウパティツサ大僧正と、ペルポラ財団総裁、ペルポラ・ヴィンシイ大僧正が、スリランカ日本大使を同道、わざわざのご臨席、大乘の総本山に上座仏教の大僧正、平成の大融合でした。私はこの機捉えて、大僧正に直接先の国際会議場での通訳なしのご法話、ネルソン領事翻訳によるものを使わせていただきたいと申し出る。大僧正は、プリーズ、カマク・ナハどうぞという。それにしても、私の思っていたスリランカは、遠くなかった。旅行も、すべて予定通り、なにひとつ障りなく、

全員無事元気で帰国できた。これすべて「仏天加護の御蔭」。と真に思えるなら、急性横着上座仏教感得症として認定。仏陀のもと、さらに絆も深く、親善使節団の役割、全うできたように思う。

方丈のことばを借りるなら、「お蔭さまでお蔭さまで、いい旅でしたハイハイ。」ただひとつ私個人的に残念だったのは、折角のスリランカ、せめて、「インド洋の真珠」でも、ひと粒おなかどのに買ってくればよかった。帰国の夜、味噌汁の具がまた、ひと品違っていただろうに。すべては、アーユ・ボーワアン。

